

## 銭大昕の元史研究について

若 松 信 爾

九州女子大学 共通教育機構  
北九州市八幡西区自由ヶ丘一― (〒八〇七―八五八六)

(二〇一一年十月十一日受付、二〇一一年十二月五日受理)

### はじめに

清代において本格的元史研究を行ったのは銭大昕(一七二八―一八〇四)である。周知の如く銭大昕の学問領域は経学・史学のみならず、あらゆる領域に及んでいることは言うまでもない。中でも史学に関する銭大昕の研究は高い学術水準を示している。内藤湖南(一八六六―一九三四)は銭大昕の史学研究の特徴として以下の点を挙げる。第一、正確な定本を必要とすること。第二、史料となるべき書籍の選択をしたこと。第三、金石文を史学に利用すること。第四、経学の知識を史学に応用したこと。第五、沿革地理の学問に注意したこと。第六、殊に彼の史学家として特別な点は、数学に長じ、天文の学問に通じたこと。<sup>①</sup>これはよく銭大昕の史学の特徴を評している。従来からいわれるように銭大昕は史学の中でも特に元史研究(本稿においては元史という表記は元朝の歴史という意味とし、『元史』という表記は正史である『元史』を指す)に熱心であったことは有名である。これは二十四史の内

『元史』が最も内容が杜撰であり、『元史』完成以降その誤謬を指摘する学者が多く存在してきたことが原因である。『元史』の欠点について、鄭鶴聲は従来いわれてきた評価を総合して、次のような点を挙げる。要約して述べると、一、宋濂・王偉に史学的才能が無かった。二、元史編纂を急ぐあまり資料の収集が貧弱であった。三、編纂を急ぐあまり内容を考訂することをしていない。四、資料を引用し吟味していない。五、編纂者達が元代の掌故に通じていない。六、漢人なのでモンゴル語に通じていない。以上のような点が『元史』における瑕疵であるとする。<sup>②</sup>銭大昕の元史研究の目的は、このような『元史』に全面的考訂を加え、完璧な新たな『元史』を作製することにあつた。結果的にはその目的は達成されることはなかったが、その過程における元史研究の成果は、杉山正明氏が「モンゴルとその治下アジア東方にかかわる諸事象についての銭大昕の偉大な研究業績は、質量ともに圧倒的なものがあり、清朝考証学の精華というだけではなく、じつところ後述する近代学術における幾多のモンゴル帝国史研究

とくらべても遜色がないどころか、依然として現在でも常にふりかえるべき存在でありつづけている。」<sup>③</sup>と述べるように、現在至って尚お重視されるべきものである。

そこで本稿では錢大昕の元史研究が如何なるものであったのか、その研究方法と成果を検討することにより、錢大昕の元史研究のあり方を考察する。

## 一、錢大昕と『元史』

錢大昕の史学は清代の經学研究法である考掘学（考証学）を応用したものであるといわれる。これは清代の史学研究に関して見てゆくと、錢大昕のみならず、おおよその傾向はあてはまるであろう。梁啓超（一八七三～一九二八）はこのような情況に対し凡そ此れ皆經學の考證法を以て、移して以て史を治む。只能く之を考證學と謂ふも、殆んど之を史學と謂ふ可からず。<sup>④</sup>と述べており、このような史学研究は史学ではないとする。ここでこのような学風を史学であるのかという問題の可否は置き、このような研究方法が一定の効果を挙げたことは認めなければならぬであろう。ことに錢大昕においては史学に対し、趙翼（一七二七～一八一二）の『廿二史札記』によせた序文の中で、

然りと雖も、經と史と豈に二學者有らんや。昔、宣尼六經を贊修して、尚書・春秋は實に史家の權輿と爲る。漢の世劉向

父子秘文を校理して六略を爲る。而して世本・楚漢春秋・太子公書・漢書紀は春秋家に列せられ、高祖傳・孝文傳は儒家に列し、初めは經史の別無し。<sup>⑤</sup>

と述べるように、經学と史学は同一レベルのものとして認識される。従つて錢大昕にとつての史学研究は經学研究に匹敵するものであった。このような認識により錢大昕の史学研究は若年の頃より始まる。『廿二史考異』の自序によると、

予弱年の時、好みて乙部の書を読む。通籍以降、尤も斯業を専らにす。史・漢自り金・元に訖るまで、作者は廿有二家、反覆校勘し、寒暑疾疢するも、未だ嘗て少しも輟めず。偶々得る所有れば、別紙に寫す。丁亥の歲、假を乞ふて里に歸り、稍く之を編次す。歲に増益有りて、卷帙滋ます増す、戊戌教を鐘山に設け、講肄の暇、復た討論を加へ、間に前人と闇合せる者は、削りて之を去り、或は同學の啓示に得れば、亦た必ず其の姓名を標ぐ。<sup>⑥</sup>

とあり、若年より史学に潜心し、二十二史すべてに対する考訂作業を行う様子が記述されている。また、当時の考掘学が主に經学に対して用いられることについて、錢大昕の言葉として『国朝漢学師承記』に、

嘗て謂ふ、惠・戴の學世に盛行して自り、天下の學者但だ古經を治め、略ぼ三史に渉るのみ。三史以下は茫然として知らず。之を通儒と謂ふを得んや。<sup>⑦</sup>

と記録されている。つまり、世間では考拠の対象とする所は經学であり、史書に及んだとしても三史、つまり『史記』・『漢書』・『後漢書』に終始していることに對し不満を述べ、このような姿勢に「之を通儒と謂ふを得んや」と批判する。当然このような姿勢から錢大昕の史学の研究対象は、歷代正史の全てに及ぶ。その正史の中で最も不備であり、難解であったのが『元史』である。錢大昕は『十駕齋養新錄』中において

元史の纂修は、明の洪武二年より始まる。二月丙寅を以て開局し、八月癸酉告成す。計一百八十八日。其の後順帝の一朝を續修し、洪武三年二月乙丑に於て再び開局す。七月丁未書成。計一百四十三日。前後を繰べて區かに三百三十一日。古今の史成るの速きは、未だ元史に如く者有らず。而して文の陋劣も亦た元史に如く者無し。蓋し史は信を傳ふるの書、時日促進すれば則ち考訂必ず審かならず。<sup>⑧</sup>

と記すように、『元史』が他の史書より劣る理由の一つに極めて短期間で編纂事業を終えたことを挙げ、続いて、

況んや宋・王は詞華の士、徵辟の諸子、皆起るは草澤自りす、迂腐にして諸の掌故を諳ぜざる者をや。<sup>⑨</sup>

とあるように、『元史』編纂の統裁である宋濂・王偉は文人であり、そのスタッフも史学に長じている者がいなかったと指摘する。つまり短期編纂とスタッフの力量の無さの二点が主な理由として挙げられる。結果としてその内容は、

開國の功臣は首に四杰と稱するも、赤老溫は傳無し。尚主・世胄は數家に過ぎずして、鄆國も亦た傳無し。丞相表に見ゆる者は五十有人にして傳を立つる者は其の半に及ばず。太祖の諸弟は、止だ其の一を傳ふるのみ。諸子も亦た其の一を傳ふ。太宗以後の皇太子は一人として傳を立つる者無し。本紀に或は一事にして再び書し、列傳に或は一人にして傳を兩にす。宰相表は或は姓有るも名無し。諸王表は或は封號有るも、人名無し。此れ義例の顯然なる者にして、且つ紕繆此の若し。固に其の文の巧拙を論ずるに暇無し。<sup>⑩</sup>

というべきものであった。そのため錢大昕はこの『元史』の誤りを是正し、新なる『元史』を独力で編纂しようとした。前述した如くその主な手法は經学における考拠を応用したものである。錢大昕の經学研究の手法は贅言するまでもないであろうが、<sup>⑪</sup> 確認のため例を挙げて示すと、

夫れ經を窮むる者は必ず訓詁に通ず。訓詁明らかにして後に義理の趣きを知る。<sup>⑫</sup>

また、他にも

夫れ六經は皆以て道を明らかにす。未だ訓詁に通ぜずして能く道を知る者有らざるなり。<sup>⑬</sup>

とあり、訓詁に通ずることを以て最優先としている。このことを元史研究に当てはめると、モンゴル語がそれに相当するであろう。更めていうまでもないが、元朝はモンゴル帝国であり、公用

語はモンゴル語である。つまり元朝政權を研究する場合の手続きとして、その当時使用されていたモンゴル語の解明が急務である。小村高四郎は『元史』を研究するべき時の課題を指摘し、『元史』に頻出するモンゴル語について『元史』に瞥見してその原義または意義の明瞭を缺く語彙の解明であらう。そもそも『元史』とそのものの研究、いな基礎作業としての本文解釈の主要障礙をなすものは、これらの語彙である。それはモンゴル語を筆頭として、ベルシャ語、トルコ語、アラビア語、チベット語、サンスクリットその他の外国語である。<sup>⑭</sup>と述べる。当然錢大昕も基礎作業、換言すれば『元史』の訓詁となるモンゴル語の理解する研究作業を行うことになる。錢大昕とモンゴル語に関しては、『嘯亭雜錄』『錢辛楣之伝』に、

又蒙古語を習ふ。故に金・元の諸史及び外蕃の諸地名を考核し、他儒の及び易き所に非ざる者なり。成王言ふ、其の上書房に在りし時、質莊王嘗つて元代の蒙古碑版を獲、體製今の書と異り人皆識らず、因てこれを章嘉國師に詢ひそれを漢文に繙譯せんことを情ふ。因て吾が題跋の端末に命じ、吾方に揮毫せんとす、先生過ぎて之を見て曰く、章嘉は固より博學爲り、然れどもその漢文に譯せし某字句には錯誤せる者有り。吾、元時變變の譯せし漢文を収蔵せる有り、取りて之を証す可しと。因りて寓に歸り原文を取り出し、章嘉の誤まる所の處畢く見はる。故に人皆拝服すと。<sup>⑮</sup>

とあり、この逸話を以て錢大昕がモンゴル語を習得していたとする説がある。<sup>⑯</sup>この話の概略をみると、章嘉國師が古いモンゴル語文献を漢文に翻訳し、その誤訳を錢大昕が指摘するという内容である。ここでは錢大昕について「蒙古語を習う」と記しているが、この話は錢大昕が収蔵する元代の變變の漢文翻訳があつたがために、章嘉國師の誤訳が発覚したというものである。つまりこの話から考えると、錢大昕のモンゴル語の語学力が分明であるとはいえない。また「蒙古語を習う」というが誰に習つたのか不明である。しかし錢大昕がモンゴル語を研究していたことは『十駕齋養新錄』等の著書からも明白である。では如何なる形でモンゴル語を研究していったのであろうか。その可能性の一つとして考えられるのは、乾隆十九年に錢大金が翰林院庶吉士に改められた時ではないだろうか。『清史稿』『職官二』に「庶吉士は館に入り、清・漢の書を分習す」<sup>⑰</sup>とある。後世林則徐は庶吉士の時代滿州語の學習に苦しんだという。<sup>⑱</sup>となれば庶吉士は庶常館において滿州語を學習することになる。錢大昕も恐らく二十七歳で翰林院庶吉士となつたとき滿州語を學習したと考えられる。滿州語はモンゴル語と近似しているため、庶常館での滿州語の學習がモンゴル語理解の一助になつたのではと推測できる。従つて錢大昕は師に就いてモンゴル語と習得した説も否定できないが、多くは独学で元史研究の基礎となるモンゴル語研究を進めていったのではないだろうか。次に錢大昕のモンゴル語理解度を示す史料を見

てゆく。『潜研堂金石文跋尾』「皇太后懿旨碑、碑陰」の項で

右碑陰は蒙古の書、左自り右す。元の時凡そ制誥は詞臣の潤色に由る者にして、國書は但だ音に對して之を書すのみ。大成至聖文宣王に加封するの詔・顔子父母に加封するの制の類の若き是なり。此れ當時の直言直話に係る。故に別に國語を以て之を譯し、本文に依らず。蓋し當時の令式此の如し、而して傳記に未だ之を言ふ者有らず。予の集録の富、考證の勤を以て、粗ば能く其の大略を識るのみ。碑陰額有り、乃ち蒙古の篆文なり。蒙古の字は帝師八思巴に創まる。其の篆文は未だ何人の製する所なるかを審らかにせず。<sup>19)</sup>

と記し、元代の詔書等の令式についての解明を金石資料等により行っている。錢大昕の金石資料研究は有名であり、『竹汀日記』には、

予方に江を渡らんと欲す。乃ち路を尋ね、瑞石洞に向ひ、寶成寺に入り、麻曷利の佛像を観る。石龕の旁はらに元の至治中、伯家奴の題記有り。旁に一石有り、亦た元人の刻する所、其の文は乃ち畏吾の書。今人の所謂る蒙古の字なり。左方の大字一行は則ち蒙古の書。今の蒙古人も亦た識る能はざるなり。<sup>20)</sup>

とあり、元代碑文等からモンゴル文字を研究していることが理解できる。当然『元史』に頻出するモンゴル語の語彙にもそれは及び、『十駕齋養新録』には多くこれらの語彙を解説した部分が見

られる。例えば「也可太傳」の項に、

食貨志、歲賜編に也可太傳有り、按ずるに耶律禿花傳に、太傅・總領也可那延に拜せられ、濮國公に封ぜらる。と。即ち志に稱する所の也可太傳なり。蒙古語に大は也可と爲す。凡そ官名の也可とは第一の稱なり。此れ志に也可怯薛と有り、職官志に也可札魯忽赤と有るは、皆第一の義を取るなり。<sup>21)</sup>

とある。これらの記述から錢大昕はより正確な元史編纂の基礎作業としてモンゴル語の研究を行っていたと考えられる。従って錢大昕がモンゴル語に堪能であったと考えるより、あくまでも『元史』の考訂と、元朝政權史の解明ためのモンゴル語研究であったと考えたほうが妥当ではないだろうか。ただし乾嘉時代の考拠学者の中では、恐らく錢大昕のモンゴル語の理解は高い水準にあったといえる。つまり元史研究の手法も、考拠学の訓詁を明らかにして文意を明らかにするという手続きを踏まえた研究であったことが明瞭に伺えるのである。

## 二、『元史稿』について

錢大昕が『元史』の誤謬の多くから、新たにより正確な元王朝の史書を作製することを企図していたことは前述したが、その成果として『元史稿』という著作が存在していたことは多くの文献に記されている。錢大昕の元史再編纂の熱意は段玉裁（一七三五

「一八一五」が記した『潜研堂文集』の序文に

生平元史に功を用ふること最も深し、惜らくは全書の手藁未だ定まらず。<sup>22</sup>

とあるように周囲の人々に『元史稿』の存在は知られている。また張之洞（一八三七―一九〇九）の『書目答問』に錢大昕の著書である『元史氏族表』三巻を挙げ、その條下に「別に元史藁一百巻有り、未だ刊せず」<sup>23</sup>と述べる。ここで『元史稿』の巻数が百巻であったことが確認される。また年譜の乾隆五十六（一七九一）年、六十四歳の頃には『元史氏族表』四巻が完成したことが記されている。その注に、

謹しみて案ずるに、公少くして諸史を読み、元史の陋略謬盭を見、一書を重纂せんと欲す。又た元人の氏族の最も考察し難きを以て、創めて一表を爲る。而して後人の撰する所の三史の藝文も亦た未だ盡さざること多し。更に搜輯して之を補綴し其餘の紀・傳・志・表多く已に脱稿するも、惜らくは未だ編定せず。是の年精力少しく差ゆ。先づ氏族・藝文の二稿を以て清本を繕成す。<sup>24</sup>

とあり、未定稿ながらも『元史稿』の存在を指摘する記述があり、段玉裁の「多く已に脱稿するも、惜らくは未だ編定せず」という文言と一致する。また錢大昕の元史再編纂の意志は「許州を過ぎて亡友周西隣刺史を追悼す」という詩の四首目に

讀史縱橫貫鼎の功

眼光月の如く羣蒙を破る。

和林の舊事編成りし後、

更に何人と興に異同を質さん<sup>25</sup>

とあり詩注に「予近ごろ元史を改修す」と記してある。この詩の作成時期については、一首目の詩注に

己卯夏、西隣許州の任に之く。予の寓齋を過ぎ別を話し、且つ言ふ子の兩湖に典試し許を過ぎるを待ちて、某當に負弩前驅すべきのみ。と。<sup>26</sup>

とある。己卯の年は乾隆二十四（一七五九）年であり、この年周西隣は許州へと赴任し、三年後の乾隆二十七（一七六二）年に錢大昕は湖南鄉試の正考官となつてゐる。この間周西隣は没したため、この詩を製作したと考えられる。つまり、錢大昕の元史再編纂の本格的企図は乾隆二十七年前後、年齢三十五歳前後であったと考えられる。また、弟である錢大昭に与えた書簡「晦之に与えて爾雅を論ずるの書」においても

予昔京師に在りて、選述に志すこと有り、李・孫の墜遺を援り、郭・邢の違失を糾し、康成の説經、叔重の解字に至りては、參互取訂し、啓悟良に多し。嘗て勸へて一編と爲し、以て述者の後に附さんと欲す。繼ひで元史を刊定するの舉有るも、力未だ兼ねる能はず。迺ち輟めて爲さず。<sup>27</sup>

とあり、この文面からも京師にいた三十代頃に、元史再編纂の意図があつたが、經書研究と並行して作業を進めることができない

かったことを伝えている。書面には続いて、

今、晦之此の書に従事せんと欲すれば、則ち予攷稽年有り。

千慮の中、或は一得有らん、暇日出して以て相質さん、何如、<sup>28</sup>と述べている。この文面からも『元史稿』が遂に完成することはなく、錢大昕にこの事業の継続を求めている。恐らく、『元史稿』は基礎的部分が出来あがっているのみで、稿本を完成させるには至らず、錢大昕はその完成は無理であると判断し、その作業を放棄してしまったのではないかと考えられる。そのため『元史稿』の編纂過程で完成した『元史氏族表』・『元史藝文志』のみを刊行するに止つたのである。『元史藝文志序』の記述に

大昕向に館閣に在りて、心を舊典に留む。洪武の舊ふ所の元史の冗雜漏落潦草、尤も甚しきを以て、擬して范蔚宗・歐陽永叔の例に仿ひ、別に編次を爲し、更に目錄を定め、或は刪り或は補ふ。次第草を屬するも、未だ緒に就くに及ばず。歸田以後此の事津遂に廢す。唯世系表・藝文志の二稿は尚ほ篋中に留む。<sup>29</sup>

とあり、翰林院にいる時から『元史』を考訂する志があつたようであるが、本格的な作業開始は前述の如く、乾隆二十七年前後であつたであろう。この記述の中で注目すべきは『元史稿』の体裁を整え、作業を始めているが、「次第草を屬するも、未だ緒に就くに及ばず」といい、官を辞した後はこれを放棄した。という文言である。いづれにしても錢大昕が『元史稿』の編纂を中止して

いることは明瞭である。『元史稿』が如何なる程度で編纂を中止されたのかについては、現時点では明確にはし難い。ただ残された文献から推測していくと外はない。段玉裁や年譜からは恰も稿本は完成しているかのようにとれるが、錢大昕自身の文章からは稿本自体が完成しているという発言は窺うことはできない。『書目答問』にみえる「一百卷」という巻数は前述した文中に「更に目錄を定め」とある如く目錄の上では百卷となっており、稿本そのものは百卷存在していなかった可能性も考えられる。錢大昕の没後の『元史稿』に関して、

按ずるに、光緒嘉定縣志の藝文志に、元史の内容簡陋なるに因り、錢大昕另に此の稿を編す。道光の初、大昕の孫師康祁門の教諭に任ぜらる。安徽巡撫陶澍問ひて乃祖の遺書に及ぶ。師康遂に此の稿を以て相示す。時に大昕の弟子南京の汪恩、安慶の知府に任ぜられる。陶澍其の校訂刊行を囑すも、後、汪の病故に因りて未だ果さず。師康も久しからずして亦た病死し、稿遂に失傳す。と載す。<sup>30</sup>

という記事がある。安徽巡撫であつた陶澍が錢大昕の孫である錢師康から『元史稿』を見せられた陶澍は、それを校訂刊行しようとして、錢大昕の弟子であつた汪恩にそれを依頼したが、汪恩の病死、錢師康も病死し、遂に『元史稿』は失伝してしまつたという。しかし、有名な話ではあるが、『元史稿』の存在は日本の書誌学者である島田翰（一八七九～一九〇三）の『訪余録』に確認

されている。『訪余録』の記載には「江浙間見る所獲る所の名人の遺著」の中で「元史藁殘本二十八巨冊」とあり、島田のコメントとして、

元史藁は竹汀畢世の精力の注ぐ所にして、元元本本一代の信史と稱す可し。所謂文前事を滅じ之を倍する者なり。竹汀の身後外間に傳本希少、其の存する其の佚するは、蓋し在るが如く亡きが如し。全書百卷、缺卷は首より卷二十五に至る。<sup>33</sup>

とある。これによるとすでに百卷ではなく、首卷より二十五卷きでか佚していることがわかる。島田の記録は日清戦争前後の頃なのでこの時点では欠本ながらも『元史稿』は存在していたと考えられる。また同書の『大元聖政國朝典章』について述べた箇所を見ると、

元典章は、世祖より起り英宗に終る。分ちて詔令・聖政・朝綱・臺綱・吏・戸・禮・兵・刑・工の各門を爲す。五朝の典章燦然として具備す。以て明修元史の草漏を訂補す可し。錢氏の元史藁多く之より采る。<sup>32</sup>

とある。この記述から『元史稿』が『元典章』を多く利用していることが理解できる。これまで『元史稿』の存在を述べる記録は多くあったが、内容について言及しているものはない。恐らくこれが内容にふれた唯一の記録ではないだろうか。錢大昕は「跋元聖政典章」の中で、この書を得たことをことのほか喜び、「百朋を獲るが如し」<sup>33</sup>と述べて重視している。『元史稿』の特に志の

部分に多く利用したと考えられる。これ以降『元史稿』の存在に関する文献はまったく途絶えてしまう。顧吉辰氏は『元史稿』失伝の理由を二つ挙げており、一つは一九二〇年代末から三〇年代の戦争にあるのではないかとし、もう一つの可能性としては日本に秘匿されているのではないかと推測している。<sup>34</sup>しかし残念ながら現在の所日本国内において発見されたという報告はない。顧吉辰氏の論文に引用される范希雷の『書目答問補正』、陳乃乾の『二十四史注補表譜考証書籍簡目』等の記述にしても、全て島田翰の『訪余録』を引用するのみで、『元史稿』を実見しているものではない。恐らく『元史稿』は散逸したものとみるほうが妥当であろう。前述したように島田翰が目撃した『元史稿』は殘本二十八冊であり、「缺卷首卷より卷二十五に至る」とある。そこで再度錢大昕自身が『元史稿』に言及した部分を検討してみる。前に引用した「晦之に与えて爾雅を論するの書」には「力未だ兼ねる能はず。迺輟めて爲さず」とあり、また「補元史芸文志序」には「次第草を屬すし、未だ篇に就に及ばず、歸田以後此の事遂に廢す」という文言あることは前述した。『元史本証序』においては

經を讀むは易し、史を讀むは難し。史を讀みて褒貶を談ずるは易し、史を讀みて同異を證するは難し。同異を漢・魏の史に證するは易し、同異を後代の史に證するは難し。昔、温公の資治通鑑成り、惟だ、王勝之のみ假りて讀み一過す。他



人两三紙を閲すれば輒ち欠伸して臥さんことを思ふ。況んや宋・元の史は文字繁多、頒かちて學官に在ると雖ども、大率之を高閣に束ぬ。文多ければ則ち検閱周くし難し。又同志相ともに商榷する者少なれば則ち、鑽研自る無し。即ち撰述有るも復た好まず。甚くは或は其の日力を徒費するを笑ふ。史学の講ぜられざるや久し。僕少時、此に志すこと有りて、晨夕一編を攜へ手に隨ひて紀錄し、元史に於て攷異十五卷を得るも、自ら搜索未だ備わらざるを愧づ。今老病健忘にして、舊學都て廢す。頃、汪君龍莊著はす所の元史本證若干卷を以て寄示す。竊に天壤間尚ほ同好有るを喜ぶ。<sup>35)</sup>

とあり、『廿二史考異』中「元史考異」十五卷を作成したことに触れ、その後「旧学都て廢す」と記すように元史研究を廢した消息を記している。また弟子である横鐘によると

先生嘗て別に編次を爲し、以て一代の信史を成さんと欲す、藁已に數々易へて尚ほ未だ卒業せず。<sup>36)</sup>

とある。この黄鐘の言によると、錢大昕は『元史稿』を作成するも、稿本完成には及ばなかったことが記されている。この記事から考えると錢大昕が生前から『元史稿』の完成を放棄していたことは理解できるが、単なる放棄ではなく稿本作成の途中で放棄したと考えられる。そうなるに島田翰が見た『元史稿』の首巻から二十五卷までの欠落も、稿本を作製する作業の中での中止、あるいは放棄であった可能性がある。理由は様々であろうが、やはり

独力での稿本の完成は無理であると判断したためであろう、故に錢大昭に後事を託すことを書簡で希望するのである。しかし錢大昭もその作業に従事することはなかった。結局、錢師康の手に残ったのは首巻から二十五卷を欠いた『元史稿』ではなかったか、故に出版することができなかったのではないだろうか。そしてその残本二十八冊を島田が目撃して記録したのではないかと推測できないだろうか。

### 三、錢大昕の元代史料収集について

錢大昕は『元史』再編纂のため、元に関する多くの史料を入手している。『漢學師承記』に

因りて元人の詩文集・小説・筆記・金石・碑版を搜羅して、元史を重修せんとするも、後に功令に違はんこと有るを恐れ、改めて元詩記事を爲る。<sup>37)</sup>

とある。これに因ると法令に抵触す可能性を恐れて『元史』再編纂を中止したかのように記している。また杜維運氏もこの説を肯定し、その背景に文字の獄の存在を指摘する。<sup>38)</sup>しかし錢大昕以前には邵遠平の『元史類編』があり、以後も多くの元史再編の著作が残されており、誰一人として罪を被った者はいない。従ってこのような理由で錢大昕が元史再編事業を中止するとは考え難い。前述したように『元史稿』を執筆中に、独力で完成させるこ

とが無理であると判断した故の中止であることは明瞭である。因に『元詩紀事』については、その存在記録されるが如何なるものであったかは判然としない。しかしながら元代に関して多くの史料を収集したのは事実である。特に錢大昕が高く評価した史料は『元朝秘史』である。跋文に、

元の太祖は創業の主なるも、史に其の事迹を述べることも最も疏舛。惟だ秘史の叙次のみ頗る其の實を得るも、其の文俚鄙にして、未だ詞人譯の潤なるを經ず。故に之を知る者尠し、良に惜しむ可きなり。<sup>③</sup>

とあり、『元朝秘史』に絶大なる史料的有效性を認めている。この錢大昕の過褒なる賛辭は有名であるが、内藤湖南は『元朝秘史』を信用しすぎるとしている。<sup>④</sup>しかし史料の少ない当時においては已むを得ないであろう。元代の史料収集は困難を極めたらしく、『元聖政典章』の入手に関しては、

予初めて都門に至り、一故家に此の書有るを聞き往きて假り之を讀まんとするも、秘して示すことを肯へんぜず。後十年、吾友長洲の呉企晉家藏の鈔本を以て贈らる。紙墨精好、百朋を得るが如し。<sup>⑤</sup>

とその間の消息を述べ、『元典章』を閲覧するのに十年かかったことを記す。また『跋元氏略』では、

氏族を遼・金に攷ふるは難し。而れども元に於いて尤も難し。遼は惟た耶律・蕭の兩族のみ。金は白號・黒號の別有り

と難も、然れども皆姓を名に繋け、猶ほ混淆に至らず。元の蒙古は七十二種、色目三十一種、但だ名を以て行はれ、氏を稱するを兼ねず、史を讀む者病ましむ。秀水の萬孝廉循初元氏略を撰し、汪吏部康古亟之を稱す。予假りて觀、殊に聞く所に逮ばず。<sup>⑥</sup>

と記し、『元史略』の多くの誤謬を指摘した上で、

且つ其の取材は正史に自る外、滋溪蘇氏・南村陶氏の兩家に過ぎず、蓋し草創にして未だ書を成すに及ばざる者なり。<sup>⑦</sup>と酷評する。錢大昕はこのような誤りを是正するためであろう

か、元代の世族を研究し『元史氏族表』を刊行している。内藤湖南はこの『元史氏族表』が後に柯邵忞（一八四八～一九三三）の『新元史』中にそのまま採用されたように述べているが、<sup>⑧</sup>それは誤りであり、李思純の『元史學』に柯邵忞の氏族表を評して、

蒙古氏族を分ちて異・白・野の三種の韃靼と爲す、蓋し波斬の史家拉施特の述べる所の蒙古支派に本づきて此の如し。直に錢大昕氏の秘史・輟耕錄を根據とし、之が氏族を成すを將ひるとは、完全推翻し其の舛訛重複の點を指出す。其の中の篇目は舊に仍るも、新たに材料を加ふる者なり。<sup>⑨</sup>

とあるように、錢大昕の『元史氏族表』が『元朝秘史』・『輟耕錄』を主としたのに対し柯邵忞の『新元史』「世族表」は十四世紀初のフレグ・ウルスの宰相ラシード・アッディーン（一二四九～一三一八）の『集史』根拠としており、錢大昕の『元史氏族

表』を採用した形跡はない。また、錢大昕の史学の特徴として金石文等の研究が挙げられるが、『跋道園類藁』に

碑志の文は史に近き者なり。其の家行状を持して文を乞う者、未だ必ずしも舊章を通知せず。筆を秉る者其の譌を承けて之を書し、遂に文章の玷と爲る。<sup>46</sup>

と述べるように、金石文の総てを鵜呑みにしていたわけではない。例として、

又た張宣敏公神道碑を撰して云ふ、歲戊戌、大帥河南忠武王阿朮に因りて以て國朝に歸す。と。攷ふるに阿述は至元二十四年に卒し、年五十四なれば則ち太宗の戊戌の歲、阿述は僅かに五歲のみ。何ぞ攷へざること此に至るや。後に元史察罕傳云ふ歲戊戌、馬歩軍都元帥を授けられ、諸々の翼軍を率ゐ、攻めて滁・壽・泗等の州を抜くと云ふを讀み、乃ち張子良本より察罕に因て以て降るを悟る。察罕も亦た河南王に封ぜられ、武宣と諡さる。後人誤りて以て阿朮と爲す。伯生察せずして之を書す。元史子良傳も亦た伯生の文に因りて之を書し、殊に慣慣たり。道園は古文を能くするも未だ心を史學に究めず。故に此れ有るなり。<sup>47</sup>

と述べ、虞集（一二七二～一三四八）の碑文に阿述とあるのは察罕の誤りであることを指摘し、『元史』も虞集の文に従ったためその誤りを踏襲したことをいう。以上のように錢大昕は元代に関する史料を広く収集している。これらの収集は長い年月と困難を

伴うものであつたと考えられる。中には意外な値段で入手できたものもあり、『跋元詩前後集』に

元詩前集六卷、盱江の傳習說卿の采集、儒學學正盧陵の孫存吾如山の編類。後集六卷も亦た存吾の編類なり。前集に虞伯生の序、後集に謝升卿の序有り。卷首に皆奎章學士虞集伯生校選と題す。蓋し、江西の書肆の人の爲す所にして、道園の名を假りて以て傳ふ。序文淺陋、亦た未必しも道園の手に出ざるなり。<sup>48</sup>

といいこの書が、利益目的のための商人が虞集の名を仮りて出版したことを記している。続いて、

小人利を嗜みて其の之を精に擇ばんと欲するも、難いかな。然れども近世博雅の收藏家は、皆未だ此の書を見ず、予京師の琉璃廠の書市に於いて、二百錢を以て之を得。戯れて家人に謂ひて曰く、此れ宋人の統を泔澌し、惡んぞ其の直に千金のみならざるを知んや。と。<sup>49</sup>

と述べ、粗悪本のため極めて伝本の少なかった元槧を二百錢で得たことを自慢している。このような元代に関するあらゆる史料の収集が錢大昕の元史研究の基礎になっていることはいうまでもないであろう。

# おわりに

以上、概観してきたように、錢大昕の元史研究は、考拠学の視点から発展している。経書と同様の手法で史書の考拠に臨んだわけであり、その成果は主に『廿二史考異』に結実している。『元史』は他の史書と比較した場合、従来の中国史書とは異なり異質な存在といえる。そのような理由から杜撰な記述が多い。錢大昕はそのため『元史』の再編纂を企図したのである。研究方法は經学研究の手法を応用したものであり、これを元史研究に当てはめた場合、当然の如くモンゴル語という障壁に当る。故に『元史』理解のための訓詁ともいふべき、モンゴル語の解釈を試みている。ここでのモンゴル語研究はあくまでも『元史』におけるモンゴル語の漢字表記についての研究を主としたものであり、錢大昕がモンゴル語を完全習得したとは考えにくい。また、前述したように多くの元代文献を駆使し、新なる『元史』編纂作業を行い、『元史稿』百巻の執筆にとりかかるが、結局は『元史藝文志』・『元史氏族表』の部分のみの刊行となる。『元史稿』が稿本の完成を見ることなく終ったと考えられる理由については、書簡などで記されているが、恐らく『元史』における現在でも比定しがたい漢字表記の地名等の名称の解釈、また、中国のみを支配したわけではないモンゴル帝国の構造、順帝以降も北元として存続したモンゴル帝国の位置づけ等、種々の理由から『元史稿』を完成させ

る作業を断念せざるを得なかったのではないかと考えられる。その後未完成の『元史稿』は島田翰が『訪余録』に首巻より二十五巻を欠く形で記録される。前に記したように推測の或を出ないが、錢大昕が生前に欠本部分を廃棄した可能性も考えられる。故に没後の出版は中止になったのではないか。以上の如く錢大昕の元史研究を概観してきたが、其の史学研究は考拠的史学であり、考訂旧史の史学に分類されてきた。しかし、その研究方法の緻密さは現在においても、高い水準を維持しており、清代史学の中でもその有効性を示す甚だ堅牢なものであったといえる。

## 注

- (1) 内藤湖南『支那史学史』平凡社東洋文庫 二四頁、二六頁 一九九二年
- (2) 鄭鶴声「清儒對於元史学之研究」史地学報 第三卷第四期 六頁 一九二四年
- (3) 杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会 五頁 二〇〇四年
- (4) 梁啓超『清代學術概論』台湾中華書局 四〇頁 中華民國七十四年 凡此皆以經學考證之法、移以治史、只能謂之考證學、殆不可謂之史學。
- (5) 『嘉定錢大昕全集』拾卷「潜研堂文集補編」江蘇古籍出

版社 七頁 一九九七年 雖然經興史豈有二學哉。昔宣尼贊修六經、而尚書、春秋實爲史學之權輿。漢世劉向父子校理秘文爲六略。而世本、楚漢春秋、太史公書、漢著紀列於春秋家、高祖傳、孝文傳列於儒家、初無經史之別。

(6) 前掲書 貳卷 一頁 予弱冠時、好讀乙部書、通籍以後、尤專斯業。自史、漢訖金、元、作者廿有二家。反覆校勘、雖寒暑疾病、未嘗少輟、偶有所得寫於別紙、丁亥歲、乞假歸里、稍編次之、歲有增益、卷帙滋多。戊戌、設教鐘山、講肄之暇、復加討論、間與前人暗合者、削之而去之、或得於同學啓示、亦必標其姓名。

(7) 江藩『国朝漢字師承記』中華書局 四九頁 一九八三年 嘗謂自惠、戴之學盛行世、天下學者但治古經、略涉三史、三史以下茫然不知、得謂之通儒乎。

(8) 『嘉定錢大昕全集』 柒卷 二二二頁 元史纂修、始於明洪武二年、以二月丙寅開局、八月癸酉告成、計一百八十八日、其後續修順帝一朝、於洪武三年二月乙丑再開局、七年丁未書成、計一百四十三日、綜前後區三百三十一日、古今史成之速、未有始元史者、而文之陋劣、亦無始元史者、蓋史爲傳信之書、時日促迫則攷考訂必審。

(9) 前掲書 柒卷 二二二頁 況宋王詞華之士、徵辟諸子、皆起自草澤、迂腐而不諳掌故者乎。

(10) 前掲書 柒卷 二二三頁 開國功臣、首稱四杰、而赤老溫

無傳、尚主、世胄、不遇數家、而鄆國亦無傳、丞相見於表者、五十有九人、而立傳者、不及其半、太祖諸弟、止傳其一、諸子亦傳其一、太宗以後皇太子無一人立傳者、本紀或一事而再書、列傳或一人而兩傳、宰相表或有姓無名、諸王表或有封號、無人名、此義例之顯然者、且紕繆若此、固無暇論其文之工巧拙矣。

(11) この点については日本では濱口富士雄の「錢大昕の考拠学の意義・「錢大昕の考拠学としての史学」『清代考拠学の思想史的研究』国書刊行会 平成六年 所収の論文に詳論されている

(12) 『嘉定錢大昕全集』 玖卷 三七一頁 夫窮經者、訓詁明而後知義理之趣。

(13) 前掲書 玖卷 五七四頁 夫六經皆以明道、未有不通訓詁而能知道者。

(14) 小林高四郎『元史』明德出版社 三十、三二頁 昭和四七年

(15) 昭樞『嘯亭雜錄』中華書局 二二二頁 一九八〇年 又習蒙古語、故金、元諸史及外蕃諸地名、非他儒之所易及者。成王言其在上書房時、質莊王嘗獲元代蒙古版、體製異於今書、人皆不識、因詢諸章嘉國師、倩其繙譯漢文。因命吾題跋端末、吾方揮毫、先生過而見之曰、章嘉固爲博學、然其譯漢文某字句有錯誤者。吾有收藏元時雙變所譯漢文、可取而證之。因歸寓取原文出、章嘉所誤處畢見、故人皆拜服。

(16) 增井經夫『中國の歴史書』刀水書房 二二六、二二七頁

一九八四 また、杜維運「錢大昕之史學」『錢大昕研究』所

收 華東理工大学出版 四三頁〜四五頁に、錢大昕が金石研究からモンゴル語を習得していたと判断している。

(17) 趙爾巽撰『清史稿』一百十五卷 中華書局 三三二〇頁 一九八六年 庶吉士入館、分習清、漢書。

(18) 黨武彦「清代の翰林院」伊原弘・小島毅編『知識人の諸相』所収 五四頁 勉誠社 平成十三年

(19) 『嘉定錢大昕全集』陸卷 五二二頁 右碑陰、蒙古書、自左而右。元時、凡制誥由詞臣潤色者、國書但對音書之。若加封大成至聖文宣王詔、加封顔子父母制之類是也。此後當時直言直音、故別以國語譯之、不依本文、蓋亦當時令式如此、而傳記未有言者。予以集録之富、考證之勤、粗能識其大略爾。碑陰有額、乃蒙古篆文。蒙古字創於帝師八思巴、其篆文未審何人所製。

(20) 前掲書 捌卷 三頁 予方欲渡江、乃尋路向瑞石洞、入寶成寺、觀麻葛刺佛像。石龕旁有元至治中、伯家奴題記。旁有一石、亦元人所刻、其文乃畏吾書今人所謂蒙古字也。左方大字一行、則蒙古書、今蒙古人亦不能識也。

(21) 前掲書 柒卷 二四六頁 食貸志歲賜篇有也可太傅。按耶律禿花傳、拜太傅、總領也可那延、封濮國公。即志所稱也可太傅也。蒙古語大爲也可。凡官名也可者、第一之稱、此志有也可怯薛、職官志有也可札魯忽赤、皆第一義。

(22) 前掲書 玖卷 一頁 生平于元史用功最深、惜全書手稿蕞

未定。

(23) 『張文襄公全集』四卷 中国書店 六五〇頁 一九九〇年

(24) 『嘉定錢大昕全集』壹卷 三七頁 謹案、公少讀諸史、見元史陋略謬、欲重纂一言。又以元人氏族最難考索、創爲一表。而後人所撰三史藝文、亦多未盡、更搜輯補綴之。其餘紀傳志表、多已脱稿、惜未編定。是年精力少差、先以氏族、藝文二稿、繕成清本。

(25) 前掲書 拾卷 一〇九頁 讀史縱橫貫弗功、眼光如月破羣蒙、和林舊事編成後、更興何人質異同。

この詩については顧吉辰氏も錢大昕の『元史』改修の意志を示すものとして重視している。「錢大昕与元史稿下落」『錢大昕研究』所収 華東理工大学出版 四四〇頁 一九九七年

(26) 前掲書 拾卷 一〇八〜一〇九頁 己卯夏、西隰之許州任、過予寓齋話別、且言待子典試兩湖許、某當負弩前驅耳。

(27) 前掲書 玖卷 五七五頁 予昔在京師、有志撰述、掇李、孫之墜遺、糾郭・刑之違失、至於康成之說經、叔重之解字、參互取訂、啓悟良多、嘗欲勒爲一編、以附述者之後。繼有刊定元史之舉、力未能兼、迺輟弗爲。

(28) 前掲書 玖卷 五七五頁 今晦之欲從事此書、則予攷稽有年、千慮之中、或有一得、暇日出以相質、何如。

(29) 前掲書 伍卷 『元史藝文志』一頁 大昕向在館閣、留心舊典、以洪武所葺元史冗雜漏落潦草尤甚、擬仿范蔚宗・歐陽永

叔之例、別爲編次、更定目錄、或刪或補。次第屬草、未及就緒。歸用以後、此事遂廢。唯世系表、藝文志二稿尚留篋中。

(30) 前揭書 壹卷 前言 三五頁 按光緒嘉定縣志藝文志載、元史內容簡陋、錢大昕另編之稿。道光初、大昕孫師康任祁門教諭、安徽巡撫陶澍問及乃祖遺書、師康遂以此稿相示。時大昕弟子南京汪恩任安慶知府、陶澍囑其校訂刊行、後因汪病故而未果。師康不久亦病死、稿遂失傳。

(31) 島田翰『訪余錄』 田中慶太郎刊 二〇二頁 大正十年元史藁、竹汀畢世精力所注、元元本本、可稱一代之信史。所謂文減於前事倍之者、竹汀身後、外間傳本希少、其存其佚、蓋如在如亡。全書百卷缺卷首至卷二十五。

(32) 前揭書 二十頁 元典章、起世祖終英宗、分爲詔令、聖政、朝綱、臺綱、吏、戶、禮、兵、工、各門。五朝典章燦然具備、可以訂補明修元史之草漏、錢氏元史藁多采之。

(33) 『嘉定錢大昕全集』 玖卷 四七九頁

(34) 顧吉辰「錢大昕与元史稿下落」『錢大昕研究』所收 華東理工大学出版 四三九頁 一九九七年

(35) 『嘉定錢大昕全集』 拾卷「潛研堂文集補編」 九頁 讀經易、讀史讀。讀史而談褒貶易、讀史證同異難。證同異於漢、魏之史易、證同異於後代之史難。昔溫公資治通鑑成、惟王勝之假讀一過、他人閱兩三紙輒欠伸思臥、況宋、元之史文字繁多、難頒在學官、大率束之高閣。文多則檢閱難周又鮮同志相與商榷者、則鑽

研無自。即有譌述世後不好、甚或笑其徒費日力。史學之不講久矣。僕少時有志於此、晨夕攜一編手紀錄、於元史得攷異十五卷、自愧搜索未備。今老病健忘、舊學都廢。頃汪君龍莊以所著元史本證若干卷寄示、竊喜天壤間尚同好。

(36) 前揭書 伍卷「元史氏族表跋」 三一四頁 先生嘗欲別爲編次以成一代信史、藁已數易而尚未卒業。

(37) 江藩『國朝漢學師承記』 中華書局 五〇頁 因搜羅元人詩文集、小說、筆記、金石、碑版、重修元史、後恐有違功令、改爲元詩紀事。

(38) 杜維運「錢大昕之史學」『錢大昕研究』所收 華東理工大学出版 四八頁 一九九七年

(39) 『嘉定錢大昕全集』 玖卷 四七七頁 元太祖、創業之主也、而史述其事迹最疏舛、惟秘史敘次頗得其實、而其文俚鄙、未經詞人譚潤、故知之者尠、良可惜也。

(40) 內藤湖南『支那史學史』 一九五頁

(41) 『嘉定錢大昕全集』 玖卷 四七九頁 予初至都門、聞一故家有此書、往假讀之、秘不肯示。後十年、吾友長洲吳企晉以家藏鈔本見贈、紙墨精好、如獲百朋。

(42) 前揭書 玖卷 四七九、四八〇頁 攷氏族於遼金難矣、而於元尤難。遼惟耶律、蕭兩族金雖有白號、黑號之別、然皆繫姓於名、猶不至混淆。元之蒙古七十二種、色目三十一種、但以名行、不兼稱氏、讀史者病焉。秀水萬孝廉循初撰元氏略、汪吏部康

古亟稱之。予假觀、殊不逮所聞。

(43) 前掲書 玖卷 四八〇頁 且其取材自正史而外、不過滋溪蘇氏、南村陶氏兩家、蓋草創而未及成書者也。

(44) 内藤湖南『支那史學史』一九六頁

(45) 李思純『元史學』中華書局 七四頁 中華民國一六年

分蒙古民族爲黑白野三種韃靼、蓋本於波斯史家拉施特所述蒙古支派如此、直將錢大昕氏根據秘史輯錄而成之氏族表、完全推翻、指出其舛訛重複點、其中篇目仍舊新加材料者。

(46) 『嘉定錢大昕全集』 玖卷 五三一頁 碑志之文、近於史者也。而其家持行狀乞文者、未必通知舊、秉筆者承其譌而書之、遂爲文章之玷。

(47) 前掲書 玖卷 五三一頁 又撰張宣敏公神道碑云、歲戊戌、因大帥河南忠武王阿朮以歸國朝。攷阿述卒于至元二十四年、年五十四、則太宗戊戌之歲、阿述僅五歲耳。何不攷至此。後讀元史察罕傳云、歲戊戌、授馬步軍都元帥、率諸翼軍攻拔潞、壽、泗等州。乃悟張子良本因察罕以降。察罕亦封河南王、諡武宣、後人誤以爲阿朮、伯生不察而書之。元史子良傳又因伯生文而書之、殊慣慣矣。道園能古文而未究心史學、故有此矣。

(48) 前掲書 玖卷 五三七頁 元詩前集六卷、盱江傳習說卿采集、儒學學正盧陵孫存吾如山編類。後集六卷、亦存吾編類。前集有虞伯生序、後集有謝升卿序、卷首皆題奎章學士虞集伯生校選、蓋江西書肆人所爲、假道園名以傳。序文淺陋、亦未必出道園手

也。

(49) 前掲書 玖卷 五三七頁 小人嗜利、欲其擇之精、難矣。然近世博雅收藏之家、皆未見此書、予於京師琉璃廠書市以二百錢得之、戲謂家人曰此宋人之汙澣統、惡知其不直千金也。



## About Yuan Historical Studies of Qian da xin

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education  
Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi,  
807-8586, Japan

No English abstract